

# The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、  
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、  
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

 公益財団法人  
**かめのり財団**  
Kamenori The Kamenori Foundation

2018年3月 No.27

かめのりアンバサダープログラムでの中高生たち



## 今号の内容

- ◇ かめのりフォーラム 2018  
第11回かめのり賞表彰式  
パネルディスカッション  
第2部 懇親会  
かめのりセッション
- ◇ かめのり中高生アンバサダープログラム 2018
- ◇ 第9回中学生交流プログラム

## かめのりフォーラム 2018

異文化交流のさらなる発展を願って  
参加生たちと関係者が一堂に会する

冬晴れの2018年1月12日(金)アルカディア市ヶ谷において「かめのりフォーラム 2018」が開催され、約120名の方が参加されました。かめのり財団12年目となる今年は、かめのり賞を見直し、「かめのり大賞」には「草の根部門」と「人材育成部門」を、さらに「さきがけ賞」を新設し、受賞された3名の個人・団体の代表者によるパネルディスカッションを行いました。この1年間のかめのり財団のプログラムに参加した日本やアジアの中学生から大学院生も集まり、それぞれの異文化体験の成果を語り合い交流する貴重な機会ともなりました。

かめのり賞選考委員と受賞された方々



詳細は次ページにてご紹介します。

## かめのりフォーラム 2018

かめのりフォーラム第1部は、公益財団法人かめのり財団理事長 木村晋介のあいさつに始まり、来賓を代表して独立行政法人国際交流基金上級審議役 大路正浩氏よりご祝辞をいただきました。

第11回かめのり賞については、それぞれの賞の性格を明確にし、18の団体・個人の応募の中から以下の3個人・団体を授賞としました。財団創設者で評議員の康本健守より、記念のトロフィーと活動奨励金100万円を贈呈しました。



この1年間にかめのりプログラムに参加した生徒・学生たちも出席



かめのり財団理事長木村晋介



かめのり財団の活動を見守る方々



国際交流基金上級審議役大路正浩氏

## パネルディスカッション 「多文化 共生に向けて」

受賞された3個人・団体の代表によるパネルディスカッションでは、個人受賞の田村太郎氏、かものはしプロジェクトを代表して共同代表の青木健太氏、グローバル人材サポート浜松代表理事の堀永乃氏をパネリストに、かめのり財団評議員・かめのり賞選考委員の宮嶋泰子がモデレーターを務めました。

宮嶋 みなさんはなぜこうした活動をされるようになったのでしょうか。

田村 きっかけは阪神淡路大震災でした。大学受験を目の前にした18歳の頃に「ベルリンの壁の崩壊」という歴史的大事件が起きて、私はいてもたってもいられずにベルリンに飛びました。その後世界を回って日本に帰ってきたら、今度は阪神淡路大震災です。その時は23歳でお金もネットワークも何もない。でもあの状況の中では「何か自分で役に立つことができないか」という思いにかられて、被災した外国人のサポートを始めました。それが「多文化共生センター」設立となり、23年前のことです。それから10年ほど過ぎ、自分たちだけでは社会は変えられないと気づき、同じ目的をもって活動する人たちを増やそうと「多文化共生マネージャー」の育成事業を始めました。おかげで仲間も増え、この資格を持つ人が500名くらいになり、あちこちで活躍しています。

青木 大学時代のサークル活動で3カ月くらいやれば良いかななんて思っていました。それが気づいたら「かものはしプロジェクト」を始めて16年。しかもここ9年はカンボジアに住んでいます。私自身カンボジアの子どもたちの実情なんて知らなくて、始めてみたらとても辛い苦しい問題でした。「子どもが売られない」ために、最貧層の女性たちが自立できるようライフスキルトレーニングを始め、次に彼女たちが実際に稼げるようコミュニティファクトリー事業を立ち上げました。手作りのバッグ、ポーチなどを作って「SUSU(スースー)」というブランド名で、カンボジアと日本で販売しています。宮嶋 「SUSU」って、現地語で「がんばって!」という意味だそうですね。

堀 私はもともと「浜松国際交流協会」というところで外国人への日本語教育に関する仕事をしていました。でも実際には、外国人が抱えるあらゆる問題、子供の教育やDVにも対応し

## 第11回かめのり賞表彰式

(敬称略)



### かめのり大賞 人材育成部門

田村 太郎 (一般財団法人 ダイバーシティ研究所代表理事)

阪神・淡路大震災で被災した外国人へのサポートを機に「多文化共生センター」を設立。多文化共生社会の形成に20年以上携わる。「多文化共生マネージャー」の養成やソーシャルビジネスによるダイバーシティ推進の担い手育成にも力を注ぐ。



### かめのり大賞 草の根部門

認定特定非営利活動法人 かものはしプロジェクト

子どもが売られない世界を作るために、カンボジアにおいて最貧層の女性たちが働けるようライフスキルトレーニング等の活動をはじめ、手作りのブランドを立ち上げることで、雇用の場を提供している。インドでも法執行支援など様々な事業を展開中。



### かめのり さきがけ賞

一般社団法人 グローバル人材サポート浜松

「人は地域の財産」を理念に、在住外国人が手に職を持ち、日本で活躍できる人材になれるよう人材育成事業を行う。とくに介護人材養成事業に力を入れ、資格取得を支援している。また、外国人児童の就学前支援にも取り組んでいる。



モデレーター  
宮嶋泰子



ていました。2009年にリーマンショックが起きると大量の失業者が出ました。浜松には大メーカーがあり、その下請け工場もたくさんあって外国人が働いています。大量の失業者を前に、彼らがこれからも日本で生きていくためには、手に職をつけないとダメなんだと気づきました。が、国際交流協会では、すぐには対応できない組織の壁がある。でも私の前には毎日100人以上が相談の列をなしている。そこで協会をやめて、「グローバル人財サポート浜松」を立ち上げました。人材教育、中でも介護職の資格取得を支援しています。最初は、外国人介護士なんていないと言う施設が8割も。でも、彼女たちが実際に仕事につくようになったら、8割の施設が外国人介護士は必要だと意識が変わりました。これが私の世界観が変わった一瞬でした。彼女たちは、言葉はたどたどしいけど、手厚くやさしく接してくれるからです。

宮嶋 活動を継続するにはどんなことが必要だと思いますか。

田村 こうした活動は、大変なこともあるけれど喜びも大きいから続けてこられました。ただ、課題は「一つの山」ではなく、「山脈」なんです。1個解決したと思うと、また次の山が現れる。それを何とかするとまた次が。

青木 スモールスタートして、まずは3カ月やってみる。もう3年やれると思えば続けたらいい。その間に一人でも二人でも助けることができれば、やらないで理屈だけ述べているよりはずっといい。ただ続けるのに大事なことは、お金の収支とともに、エネルギー収支も考えること。頑張りすぎて3年くらいで燃え尽きてしまう人も多いんです。そして時々立ち止まって考えること。私の例でいえば、組織として今はインドへも進出しているんですが、私自身立ち止まって考えたときに、やはりカンボジアにこだわって事業をやっていくと決めました。

宮嶋 青木さんの事業の素晴らしい点は、彼女たちに与えるばかりでなく、彼らが自立できるようなプロセスを作ったことですね。

青木 私たちの活動は自立支援が目的なので、自己満足ではなく、作ったものが人を喜ばせ、お金をいただけるものになっているかどうか、そこはシビアに見ます。

宮嶋 経済的には大変でしょうが、みなさん自分の生活をどう支えていますか。

堀 自分の生活だけだったら、アルバイトしてでもなんとかかなと思います。ただ、人のお金よりだけのNPO活動は限界があって、自分たちである程度の収入を確保できる方策ができれば、何とかかなと思います。それに補填される事業があって今は成り立っています。

田村 日本はチャンスがないとかいわれますが、そんなことはない。私はいろいろな人に助けられてここまでできました。23年間活動を続ける中で、従業員の給料を遅配したことは1度もない。これだけは胸を張っていえます。今は私も同世代の平均より所得がありますし、NPOはみなさんが思っているほど、貧しくはないですよ。

宮嶋 ある程度の財政基盤があるからこそ、田村さんはこうして何十年も続けてこられた、ということでもありますね。

田村 本気でやっているかどうか、足元をみられます。こちらが一生命懸なら日本社会はきちんと評価してくれます。

宮嶋 トランプ政権をはじめ世界の動きが反グ

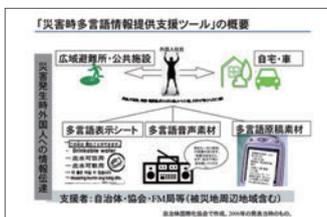
ローバル化に向かっていますが、これだけはやっていきいたいと思うことは何ですか。

田村 これからの時代、国境を越えた人やもの、情報の流れは止められない。私は楽観的です。2020年に日本に来た人が、日本ではこんなに多様な人が多様に活躍しているんだと、感心してもらえるような社会にしたいですね。

青木 私は今カンボジアに住んでいる外国人ですが、私自身の中にも差別意識や多文化共生への抵抗感があると気づかされることがあります。だからこそ私たちが教育しているライフスキルには、そうしたものを乗り越える力が含まれていて、ライフスキルトレーナーの育成もカンボジアで行っています。

実は先日多摩少年院を訪ねたのですが、職員の方が「この子たちは反社会的ではないんです。非社会的、つまり社会にうまく適応できないところに問題があるんです」と。ライフスキルが必要なのはカンボジアだけでなく、日本でも必要とされていると思いました。世界で通用するライフスキルを追求していきたいですね。

宮嶋 昨年の2月に私もバレーボールの選手とともにカンボジアに行く機会がありました。現地で地雷処理の活動をしている日本人がいますが、その地雷をとった跡地でバレーボールの試合をしたのです。しかし、ボールは拾いにいかない、片付けることを知らない、ゴミはポイポイ捨てるなどのカンボジア人を目にして、ライフスキルって必要だな、生活していく力から教えていかななくてはならな



田村氏が開発に携わった災害時多言語情報ツールの概念図



かめのはしプロジェクトの手作り品「SUSU」のいろいろ



人財サポートだけでなく就学前の子供たちへの教育も

この1年のかめのり財団のプログラムに参加した中・高・大学・大学院生プログラムごとに登壇

パネルディスカッションに聞き入る参加者たち



かめのり財団創設者・評議員  
康本健守

AFS 日本協会副理事長  
古川恵子氏

いと思いました。

堀 私の母校の校訓に「婦人の中に未来の人は作り」という言葉がありますが、外国人の女性たちも日本で子を育て養い、親や連れ合いの看取りをするという当たり前の暮らしができることを願っています。日本人女性と同様に彼女たちが日本で活躍できる社会、日本に生きていて良かったと思える社会にしたいですね。

宮嶋 3人の素晴らしいお話をありがとうございました。



## 第2部 懇親会

フォーラムの第2部懇親会はかめのり財団創設者の評議員 康本健守のあいさつで始まり、来賓を代表して公益財団法人 AFS 日本協会副理事長古川恵子氏に乾杯の音頭をとっていただきました。立食パーティでは、中学生や高校生と積極的に交流する場面がたくさんあり、世代を超えたにぎやかな歓談の場となりました。その後、プログラムごとに参加生が壇上に上がり、一言ずつ感想や成果を述べました。

カンボジアを訪問した高校生からは、キングフィールドを前に平和の尊さを実感、それを伝えるために帰国してから3回報告会を行ったという発表や、出発前はその国について好感をもてなかったが、今は友人もできて大好きになった。日本のことを聞かれることも多く、日本についてももっと勉強しなければなどの感想がたくさん聞かれました。



立食パーティでは世代を超えた交流も

## かめのりセッション

「かめのりフォーラム」に集まった参加生たちは、終了後国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊し、翌1月13日(土)に「かめのりセッション」を行いました。初めに理事・事務局長西田浩子から「チャレンジし続ける、異文化の人と協働できる、自ら創造できる人になってほしい」とメッセージがあり、プログラムごとに分かれて振り返りのディスカッションを行いました。食事や習慣など身近なトピックから、どのような学びがあったか、参加前に設定した目標が達成できたか、帰国後どのような行動をしたかなどを話し合いました。

最後に全体での発表会を行い、中国を訪問し

た中学生が、事前に予想していたよりも中国は環境問題に真剣に取り組んでいた。先入観にとられず、自分で調べ、実際に見て確認する必要性を痛感したと発表しました。すると、中国からの大学院奨学生からは、自分が見たものすべてが正しいとは限らない。物事は正面から見ただけでなくさまざまな角度から検証する。とくに中国は広いし人口も多い、地域によって習慣も異なるのでいろいろな人と話すことが大事だという先輩としてのアドバイスも。そして、「これからもチャレンジをしていくと傷つけられることもたくさんある。けれどもそれを恐れないで」という温かい励ましの言葉もありました。

大学院奨学生からは、後輩たちへの励ましの言葉も



プログラムごとに小グループになっての振り返りセッション

## かめのり中高生アンバサダープログラム2018 フィリピンへの派遣

2018年1月20日(土)から28日(日)までの9日間、日本全国から集まった12人の中高生が「かめのりアンバサダー」としてフィリピンに派遣され、現地の高校生をはじめ、いろいろな世代とコミュニケーションをとりながら、日本とフィリピンの文化や社会を考える体験をしました。



にほんご人フォーラムの開会式



グループワークはどうやって上手く伝えるか



デ・ラ・サル高校で書道のデモンストレーション

英語では「ambassador」は一般的に「大使」と翻訳されますが、日本語の「アンバサダー」は「親善大使」や「広報大使」など広い意味で使われることも多く、「かめのり中高生アンバサダー」もかめのり財団の「親善大使」としてフィリピンでさまざまな体験をしました。このプログラムの3つの目標(①さまざまな場で、自身のコミュニケーション能力を実感する ②フィリピンの文化、社会などを知り、文化の異同を理解する ③人との協働においてどのような能力が必要なのかを、体験を通して知る)に加えて、参加した中高生たちはそれぞれの目標を立て、その達成にも取り組みました。

初日のマニラ観光ではフィリピン人の愛国心や多文化の歴史を知り、3日目、4日目に訪問したデ・ラ・サル高校&大学やUHF

(Unang Hakbang Foundation=経済的に恵まれない子どもたちを支援する施設)ではJICAで聞いた経済格差を実際に肌で感じましたが、その一方で社会的地位が違っていてもポジティブな思考を持っている人が多いことも分かりました。

国際交流基金マニラ日本文化センター主催の「にほんご人フォーラム in フィリピン」では、日本語を学んでいるフィリピン人高校生たちと3日にわたって、テーマの「ゴミ問題」について話し合いました。日本人生徒1人とフィリピン人生徒3人の4人が1グループになっての協働作業では、日本語だけでなく、英語、フィリピン語も飛び交い、自分のコミュニケーション能力の実力と限界を実感しました。そして最後の日には、フィリピンに今も残る伝統的な文化、踊り

や音楽、古代文字を勉強し、夜はフィリピンで学んだ成果を発表しました。

たくさんのチャレンジを乗り越えた12人、「英語を頑張る」、「もっとポジティブになる」等の決意を述べた生徒が多く、「友達や家族にみんなが知らないフィリピンについて話してこの経験をシェアしたい」という声もたくさん出ました。「12人全員がそろってまた会うことはないかもしれない……」と涙を見せる生徒もいれば、「人生は出会いや別れの積み重ねだから、また会える日を楽しみにして今は笑おう」とポジティブに別れを惜しむ生徒もいました。そして、1月28日にはたくさんの思い出とともに無事に帰国し、それぞれの家へと帰っていきました。貴重な体験の種が日本全国に散り、いつか花開くことを期待しています。

### 参加中高生の体験後アンケートより



意思疎通にとっても苦労したが、結局はどこでも打ち解け、一緒に盛り上がる事ができた。デ・ラ・サル高校生のプレゼンの中に、「friendship has no barrier」という言葉があったが、まさにそのとおりであることを実感した。

フィリピン人の人を楽しませる力と発表の上手さには舌を巻いた。スピーチもファッションショーも素晴らしいかった。日本人にもっとエンターテイナー要素が必要だと思う。



フィリピン人は戦争のことを深く知っているにもかかわらず、日本を許してくれている人が多い。戦後の必然的な支援だと思っていた日本の支援活動にもフィリピン人が感謝しているところを見て、何も知らない日本人が多いことに切なさを感じた。

UHFでは日本の手遊びで盛り上がりました



フィリピンの伝統楽器を体験

報告：東京外国語大学 世界言語社会教育センター 特任講師(フィリピン語)フロリンダ・バルマヒル

## 第9回中学生交流プログラム 中国への派遣

2017年11月、公益財団法人 AFS 日本協会とともに第9回中学生交流プログラムが実施されました。今年には「環境を考える」をテーマに、中国における環境問題について理解するためのセッション・地方へのフィールドトリップ、学校訪問、現地家庭へのホームステイ等を実施しました。

参加した中学生(以下「参加生」)は日本の出身地域に関する環境問題のプレゼンテーションを出発前に準備し、現地で発表を行い、環境対策が進んでいるといわれる江蘇省常州市へ行き、ソーラーパネル工場やリサイクル処理施設を視察しました。日本では、中国は「環境が悪い」「常にPM2.5などの大気汚染がひどい」などのイメージが定着しており、参加生からも出発前に「どれくらい環境汚染がひどいのかこの目で確かめてみたい」というコメントがありました。しかし我々が滞在を通して感じたことは、中国は自国で起きている環境問題の対策をしっかりと考えている、ということでした。電気オートバイや誰でも借りることができるシェア自転車が街中で普及していたり、常州の町はゴミがほとんど落ちていなかったり、大気汚染の影響のスモッグで有名な北京でも晴天の日が見られたことなど、現地ではいい意味で予想を裏切られるという経験の連続でした。

テーマ学習以外のところでも、中国の一般家庭へのホームステイを通じ、生の中国文化や言葉は通じなくてもホスピタリティーあふれる中国人の優しさに触れました。また滞在中盤はインターナショナルスクールに滞在し英語で授業に参加したり、学生寮で夜まで現地学生と語り合った参加生もいたり、貴重な体験ができました。

今回の訪問を通じて参加生全員が感じたことを一言でまとめると、「百聞不如一見(百聞は一見にしかず)・・・まさにこのことわざがふさわしい交流プログラムでした。

報告：公益財団法人 AFS 日本協会 高橋裕之

常州のソーラーパネル工場を見学



北京の学校で折り紙を紹介



オリンピック競技場をバックに記念撮影

### 今後の予定

2018年4月 大学院留学アジア奨学生 新奨学生授与式・交流会  
6月 ベトナム高校生にほんご人100人訪日事業  
第12回かめのり賞 募集開始

### 参加者募集

かめのりスクール2018  
にほんご人フォーラム2018

今夏実施の日本とアジアの中高生が協働する2つの研修プログラムをご案内します。「かめのりスクール2018」：7月27日(金)～30日(月)の4日間、御殿場で行われます。「にほんご人フォーラム2018」：8月25日(土)～31日(金)の7日間、インドネシアのバリで行われます。いずれも応募締切は、2018年5月15日(火)。詳細は、4月9日以降ホームページでご確認ください。

発行人 / 西田 浩子 編集 / 悠プランニング  
デザイン / イワブチサトシ (BUTI design) 印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麴町5-5 ベルビュー麴町1階

TEL : 03-3234-1694 FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp URL : http://www.kamenori.jp/